

今回「1920年以前のアメリカカメラ」と言うテーマについて話すことになった。

このテーマで思いついたのが3年ほど前に入手し、2年前の銀座歩行者天国撮影会で集合写真(写真6)を撮るのに用いた、アメリカのロチェスター・オプティカル社製のポニー・プレモNo.4というカメラである(写真1)。

ロチェスター・オプティカル社は、1883年にW.F.カールトン(William F. Carlton)によって設立されたカメラ製造会社で、後に、業績不振になっていた縁者のH.B.カールトン(Harvey B. Carlton)が設立したロチェスター・カメラ・アンド・サプライ社他数社と合併しロチェスター・オプティカル&カメラ社となった。しかし事業としては成功せず、結局1903年にイーストマン・コダック社に買収されロチェスター・オプティック社となり、1907年にはイーストマン・コダック社のロチェスター・オプティック・ディビジョンとなった(注1)。

ポニー・プレモNo.4は1898年から1912年頃(明治31年～大正元年頃)まで製造販売されたものであるが、現機のピントグラスがついているバックに刻印されている Patent No.の一番新しい数字が1903年(明治36年)であるので、コダック買収後製造された物と思われる。

このカメラは古物商からネットオークションで落札した。古物商から送られてきた物は大きな皮鞆から純正フィルム

ホルダーまで揃っているものであった。さらにそのカメラで撮られたと思われる現像されたガラス乾板が30枚ほど一緒に送られてきた。

まず驚いたのは、アメリカで新品が販売されていたのと同時代に日本で同じカメラを日常使っていた人がいるということであった。

この時代の日本において大型暗箱タイプのカメラは普通の人が持てる物でなかった。この様なカメラを使うのは、かなり裕福な人の道楽であっただろう。その当時この様な写真機は小西本店(六櫻社)や浅沼商会などによってプロ用としてだけではなくアマチュア用としても製造・販売されていた。

アマチュアといっても当時は金持ちの道楽で、しかもセミプロ級の腕を持っていた。1889(明治22)年にはアマチュア写真家、写真師および写真機材店が加わり日本写真会ができ、以後写真コンテストも行われるようになっていく(注2)。

研究会終了後、最近中判大判に興味を増し修理勉強会にも熱心に通っている戸田晃史さんから、明治41年頃浅沼商会から発行されたポニー・プレモの目録のコピーをいただいた(図1、注3)。ポニー・プレモ(4号、キャビネ判)は85円であった。「値段の(明治・大正・昭和)風俗史(上、下)」(朝日文庫 昭和62年)で当時の給与水準を初任給で調べてみると、公務員は明治40(1907)



写真2 画像中右肩に拡大した石碑の文字に注意。大正9年6月の文字が見える。間違いなく大正9年6月以降に撮影されたものだ。

年で50円、大正7(1918)年は70円であった。銀行員は明治43(1910)年～大正7年まで40円で変わらず、小学校教員は大正7年で12～20円、巡査が大正7年で18円とあった。85円という価格が当時の平凡な市民の中でどのくらいの価値を持つものかははっきりしないが、普通の人のもてるものではなく「お大尽の道楽」に相当する価格であったろうことは想像できる。この問題は今後の研究課題にしたい。この様な会員同士の情報のやりとりができたことはAJCCなれ



写真1 ポニー・プレモ4号 Pony Premo No.4
レンズ:5×7 プラナトグラフ 5X7 Planatograph
8.5インチ(21.5cm) F8~F128。シャッター:ボシュロム(Bausch & Lomb) エア式 T、B、1、2、5、25、50、100。1/5秒以下スロープランジャーが作動。
本体は木製革張り、蛇腹は赤革、レンズボード、鳥居、ベッドは木製ニス塗りである。写真中央下には本来反射ファインダーが付いている場所だが、欠品のため水準器を載せてある。

種別	二號	三號	四號
二枚掛	參拾八圓	五拾貳圓	六拾貳圓
カビネ	五拾八圓	六拾八圓	八拾五圓

●二枚掛取替一枚……金貳圓參拾錢
●カビネ取替一枚……金貳圓八拾錢

ポニー・プレモ暗箱代價表

American Rochester & Co.
Pony Premo.
No. 2, 3, & 4.

●三號は二號と同じけれど、其異なる所はシャッターはピント式にして一秒より百分一迄並に定時の速度を與へらる。
●四號は三號より一層精巧にして鏡玉は五メトリカにしてシャッターはピント式なり且つ蛇腹は長く筒輪軸により伸縮自由にして堅固なり

●二號は全體は方形をなし暗箱を縦横に如何せしめて撮影し遠近鏡玉を具ふシャッターはセムナードを備ふるものにてゴム珠により定時開自在なり且つ虹彩鏡、ファイナングレー水平器を備ふる

●一號は全體は方形をなし暗箱を縦横に如何せしめて撮影し遠近鏡玉を具ふシャッターはセムナードを備ふるものにてゴム珠により定時開自在なり且つ虹彩鏡、ファイナングレー水平器を備ふる

●三號は二號と同じけれど、其異なる所はシャッターはピント式にして一秒より百分一迄並に定時の速度を與へらる。
●四號は三號より一層精巧にして鏡玉は五メトリカにしてシャッターはピント式なり且つ蛇腹は長く筒輪軸により伸縮自由にして堅固なり

●暗箱中第一流に位し構造完全にして運用の自在なる改良に堪へたり用材はマホガニーにして堅皮を以て外部を蔽ひ實用に最適す蛇腹は伸縮作

図1 明治41年頃の浅沼商会の目録の一部、ポニー・プレモ四号とあるのが今回のPony-Premo No.4である。カビネ(キャビネ=5×7インチ)判で85円(八拾五圓)とあるのが見える(注3)。

ばこそ、戸田さんありがとうございます。

現像済みガラス乾板を見るのは初めての経験であったが、その内の何枚かは一目見てその仕上がりの素晴らしさがみてとれた。好奇心がむくむくと湧き上がりカメラのレストアは後回しにして早速フィルムスキャナーでスキャンを試みたら、見事な画像が現れた。なお原版は5×7インチだがスキャナーの都合から4×5でスキャンしたので画面が一部欠けてしまった。そのガラス乾板であるが、家族の記録写真である。

写真の中に大正9年6月と刻んだ石碑があるのでその年代を挟んだ数年の記録だろう(写真2)。全部の紹介はできないがガラス乾板から当時の撮影事情が垣間見られるものを数点紹介する。但し、どこの誰だか分からないが写っている人々の係累・縁者が残っているかもしれないので、顔の部分にぼかしを入れたことをお断りする。

お母さんが前に子供を抱えている家族写真がある(写真3)。そのお母さんの組んだ手の部分の拡大写真が(写真3a)で、手の質感が見事に表現されている。写真4および5を見ると「さあ、写真撮るから並びなさい。少しだけジッとしてね！」という母親の声が聞こえてきそう。しかしジッとできない子供は動いてぶれている。手持ちだとあらかじめホルダーが装填されているのでピントグラスは使えず、ピント合わせは目測になる。絞り込めばピントは大きく外さないが、スローシャッターを使わざるをえない。冒頭に述べた銀座の時の撮影データは、絞りF64、シャッタースピードは1/5秒だった。そこまで絞れば全景がほぼパンフォーカスとなり後ろのビルも鮮明に写っている(写真6)。当然わずかでも動くものはぶれる。画面左隅を通過する自転車が完全に流れている。子供の様な動くことが当然の被写体を追う時にはシャッタースピードは早めを使わざるをえない。

長い焦点レンズ(8.5インチ=21.5cm)



写真3



写真5

写真4および5 写真4では男の子の顔が大きくぶれた。写真5は幼児は全体に、女の子は顔がぶれているが手押し車はピントがきている。

なので、少々絞ってもその被写体深度は浅い。シャッター速度を速めると絞りは開けなければならないことから目測では相当に厳しいピント合わせが求められる。これらの乾板のほとんどはピントを外していない。また被写体ぶれはあっても撮影者の手ぶれらしきものは見られない。相当な使い手だったことが想像される。

男性だけの多分旅行中の記念写真と思われる写真があった(写真7)。これは三脚を使ったものと思われ、相当にシャープに写っている。人物部分を大きく拡大してみた、優れた描写力がわかると思う(写真7a)。



写真6 ポニー プレモ4号で撮影した記念写真

この自転車は像が流れている



写真3a

写真3a 写真3の中央部を拡大した写真 母親の手の部分の質感が見事に写しとられている。



写真4

このような物は望んでも簡単に手に入るものではない。ひよんなことから入手し、ガラス乾板に封じ込められた昔の写真家の技量とその家族写真を通して日本の原風景を垣間見ることができたのは、まさに感動ものであった。往時の写真事情や社会情勢などを多く学ぶこともできた。何時かお目につけたいと考えていたが、研究会で発表する場を与えられ披露できたのは幸であった。会場でカメラとそれで撮られた往時の写真を見た多くの会員から「興味深いものであった」との声をいただいた。お見せしてよかったと安堵している。

1800年代の写真は各種カメラ展など

でも展示されており、その写真の完成度の高さは瞠目するものがある。その当時の写真を取り巻く環境や感材・現像処理などの条件は現在とは比較にならないほど悪いものであったと思われる。そんな環境でもやはり素晴らしいものを生み出すのは人間の努力と工夫であると思う。

以前AJCC写真展に1896年ブルズアイ・コダックで木曾路の夜の宿場町の写真を出品したことがある。その宿場町の夜景のイメージは過去何回か訪れた経験から頭にあり、何とか撮れないものかと考え実行に移した。勿論必要なものを自作するなど相応の準備をして現地に向かった。決して現地で思いつきで撮ったものではない。結果、自分でも驚いたほどの素晴らしい雰囲気の写真になったと自負している。

アメリカのカメラに限らないが、この



時代のカメラは少々使いにくいですが、それをクリアする為の努力に確実に報いてくれる力を備えている。これからもおおいにこの時代のカメラを活かし、長生きさせて写真を楽しみたい。



写真7a 一番下中央の人物を拡大。コントラストがやや高いが、極めてシャープに写っている。三脚を使用した記念写真だろう。

注1「フィルムとカメラの世界史」(R.V. ジェンキンス著 中岡哲郎+高松亨+中岡俊介訳 平凡社 1998年)を参考に編集部で追記。
注2「日本カメラの歴史－歴史編」(毎日新聞社 1975年)P26より編集部で引用・追記
注3 寺岡晴久氏のインターネットサイト<http://www2f.biglobe.ne.jp/~ter-1212/sakura/prano41.htm> よりコピー